

関係各位

山口市長 伊藤 和貴

## 第29回中原中也賞の発表

受賞詩集	わた て 渡す手			 写真：野村佐紀子		
著者名	さとう あやか 佐藤 文香					
出版社	思潮社	刊行年月日	2023年11月30日			
著者の住所 東京都国分寺市		出身地 兵庫県神戸市				
年齢	38歳	生年月日	昭和60（1985）年6月3日			
性別	女	職業	俳人	最終学歴	早稲田大学第一文学部	
《コメント》						
<p>13歳で俳句を書き始めて、25年が過ぎました。ここ数年は俳句というジャンルを超えて、自分なりに現代日本語詩について考えていました。</p> <p>自由詩の詩集をつくることを思い立ってすぐ、詩人の岡本啓さん、思潮社の藤井一乃さんに相談しました。この詩集が刊行されたのは、お二人のお力添えによります。ほか、多くのつくり手の仲間との交感、交歓のおかげで、現在の私があります。みんな、ありがとう。</p> <p>2021年、中原中也記念館の特別展関連イベントのオンライン座談会「中也詩集を装幀して」を視聴しました。その後、同年刊行の第三句集『菊は雪』をデザインしてくださった佐野裕哉さんが、特別展のために制作した中原中也『<u>山羊の歌</u>』のうち1冊を、私に手渡してくださいました。今回の『渡す手』も、佐野さんによるデザインです。</p> <p>今後も定型詩と自由詩とが、日本語学と日本文学とが、日本の詩と世界の詩とが、気楽に手を差し伸べあう場を、作品と行いによって提案できるようつとめてまいります。</p> <p>このたびは、本当にありがとうございました。</p>						
《選考経過》						
<p>公募、推薦の詩集240点について本年1月に開催された推薦会での検討の結果、伊口さや『<u>大人になつたらこわくないよ</u>』、大島静流『<u>鶯の城</u>』、貝塚津音魚『<u>里山ーイノシシのうた</u>』、姜湖宙『<u>湖へ</u>』、佐藤文香『<u>渡す手</u>』、佐峰存『<u>雲の名前</u>』、高橋実里『<u>とおくの火</u>』の7冊が選ばれ、本日の選考会の対象とされた。今回、川上委員は止むを得ないご事情により急遽書面参加となった。</p> <p>貝塚津音魚『<u>里山ーイノシシのうた</u>』は、環境問題をテーマとし、人間以外の生物と人間との軋轢を取り上げることを通して、普遍的な課題への視点をもたらす異色の作品として注目された。姜湖宙『<u>湖へ</u>』は、日常の中に不意に差し込む痛みと向き合う切実さや、作品から感じ取られるキャラクターのユニークさが評価された。最終的に討議の対象となったのは、大島静流『<u>鶯の城</u>』と佐藤文香『<u>渡す手</u>』の2冊だった。大島詩集は「転倒する王国」や「彫刻」などの作品に、ある種の諦念とともに世界の危機感を捉えようとする視点がある。硬質な筆致や着地点の見定め方などが評価された。一方で、現代詩としての既視感があるとの意見も出された。佐藤詩集は各篇にスタイルの一回性が感じられ、言葉のセンスの高さ、自在さが注目された。良くも悪くも、定型詩である俳句の作者として培われてきた言語感覚が現れている。「縦の感覚」「花筏」「行くということ」などの作品に作者の特徴が出ていて、言葉に関する引き出しを多く持っている書き手であると思われる。そこに、今後の展開も含めて期待が集まることとなった。</p> <p>議論は最後の段階まで大変白熱したが、佐藤文香『<u>渡す手</u>』が第29回中原中也賞にふさわしい詩集として選ばれた。</p>						
<p>選考委員：カニエ・ナハ、川上未映子、野崎有以、蜂飼耳、穂村弘（50音順・敬称略）</p>						

《山口市長コメント》

新たな顔ぶれとなりました選考会において、この度第29回中原中也賞が、佐藤文香さんの詩集『渡す手』に決定しましたことを、心からお祝い申し上げます。

この度受賞されました佐藤文香さんが、今回の受賞を契機に尚一層、活躍の場を広げられ、更なる飛躍をされますよう心から御期待申し上げます。今後とも多くの方が、日本の近代詩史に偉大な足跡を残した本市出身の中原中也の業績を顕彰するこの賞をひとつの目標として創作活動に励んでいただければ幸いです。

令和6年2月17日 山口市長 伊藤和貴

※受賞者の年齢は、R6.2.17 現在